東　俣　野　10月号
東俣野小学校　学校だより　　平成２９年１０月２日

クラス会

校長　　村田 幹男

管理職になって早 11 年目を迎えました。学校では職員室や校長室で仕事をしている時間がほとんどなのですが、クラスに入って黒板の前で話をする機会も全く無いわけではありません。この瞬間は妙に懐かしさを覚えます。

１９８２年から２０数年、学級担任をやってきた私は、まちで教え子にばったり出くわす機会もあります。たいていの場合は、ひと言ふた言話して終わるのですが、たまに、思わぬ展開になるときもあるのです。

今年の７月。市内の小学校修学旅行担当者が集まる会合の折に、初任のときの教え子Ｎ子に会いました。Ｎ子はもう４４才。今、横浜市内の小学校教師です。教え子だった小学校３年生のときから毎年年賀状をいただいています。「久しぶり。元気そうで安心したよ。」と声をかけた次の瞬間。

「村田先生、そろそろ２０年ぶりにクラス会やりたいと思っているんです。準備すすめます。連絡先が分からない子もいるので大勢集まれないかもしれないですけどね。」

うれしい限りです。この子たちは、自分たちが就職した頃、盛大にクラス会を開いてくれました。その時先頭に立って企画してくれたのもＮ子でした。

夏休みのある日。Ｎ子のはからいで、Ｎ子、Ｔ男と居酒屋で会う機会ができました。昔話に花が咲きました。「漢字に厳しかった」「体育の授業など、他の先生とちがったことをしていた」「よく授業と関係ない話をしていた」などなど、２０年前のクラス会では聞けなかった話もしてくれました。Ｎ子は「自分でもよく分からないけど、教師になろうと思ったきっかけの一人は村田先生」と言っていました。当時初任で、教師としての技量もない私に対してなぜ？と思ったので、聞いてみると、「　大人って楽しそう　って思ったのは確か」と・・・。

子どもは子どもなりの目で教師を見ているのだと思います。それは教師に対してだけでなく、親に対しても同じです。そして、小学生くらいになれば、思っても口に出さないことの方が圧倒的に多いのです。大人が、子どもにプラスになる影響だけ与えられるならよいのですが、実際はマイナス影響を与えてしまうことだってたくさんあるわけです。日々の生活の中で、子どもに後ろ指さされぬよう、襟を正していくことも重要なのだと再確認した次第です。